

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 28 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530777

研究課題名（和文）児童養護施設入所児とケアワーカーの愛着及び相互作用に関する基礎研究

研究課題名（英文） A study on institutionalized children's and their caretakers' attachment and interaction

研究代表者

桂田 恵美子 （KATSURADA EMIKO）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：90291989

研究成果の概要（和文）：児童養護施設児 29 名（平均年齢 6.4 歳）とそのケアワーカー 6 名が研究対象者であった。それぞれの愛着タイプの組み合わせによって、遊びでの行動、相互作用が異なるのかを検討した。その結果、安定型同士の組み合わせはその他の組み合わせよりも、子どもの従順さと相互作用において得点が有意に高かった。また、ケアワーカーのバーンアウト度が高いと、遊びでの攻撃性が高く、応答性が悪かった。さらに、そのバーンアウト度は母親の拒絶的養育態度と関連があった。

研究成果の概要（英文）：Twenty-nine institutionalized children with average age of 6.4 years and their caretakers (n=6) participated in the study. We examined whether child behaviors and interactions in the play session would vary depending on the attachment types of each child and his/her caretaker. Results showed that child obedience scores and the interaction scores were higher when both child and adult had secure types than in other combinations. Caretaker level of burnout was positively correlated with aggressiveness and negatively correlated with responsiveness in the play session. In addition, caretaker burnout scores were positively correlated with his/her mother's rejecting child rearing behaviors in his/her childhood.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学、臨床心理学

キーワード：児童養護施設、アタッチメントドールプレイ、成人愛着インタビュー（AAI）、子どもとケアワーカーの愛着の組み合わせ、子どもとケアワーカーの相互作用、子どもの問題行動、ケアワーカーのバーンアウト

1. 研究開始当初の背景

近年、児童養護施設児の入所理由は、親のネグレクトや虐待が多く、入所児童の愛着が懸念される。入所後、子どもたちは安定した

生活を送る中で、愛着の再構築が望まれるが、施設という環境は、家庭とは違い、一人の子どもと特定のケアワーカーの一対一の関係が築かれにくい。そのため、安定した愛着の

再構築も難しい状況である。実際、児童養護施設で暮らす幼児は、家庭で暮らす同年齢の子どもに比べて安定型の愛着タイプが少ないとの研究報告 (Katsurada, 2007) がある。乳幼児期の愛着は内的作業モデルの形成へとつながり、その後の人格形成や社会適応に影響する (Bowlby, 1969; Ainsworth et al., 1978; Sroufe, 1983)。ゆえに、児童養護施設における愛着の再構築は困難なことではあるが、大変重要な課題である。

入所児の愛着の再構築のためには、ケアワーカーの子どもへの対応が最も重要になってくる。これまでは、児童養護施設入所児の愛着にのみ焦点をあてた研究が多かった。しかし、入所児の愛着の再構築を考える上では、ケアワーカーの愛着にも焦点をあて、子どもとケアワーカーの愛着の組み合わせにも注目した研究が必要である。

また、児童養護施設のケアワーカーのような対人援助職においては、バーンアウトの程度なども子どもへの対応に影響してくると考えられ、そのバーンアウトも愛着との関連が示唆されている。そのため、入所児の愛着だけでなく、ケアワーカーの愛着にも焦点をあてた研究は、入所児の愛着の再構築のためにも意義がある。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、児童養護施設入所児とケアワーカーの愛着タイプを世界的に使用されている測定法；子どもはドールプレイで、ケアワーカーは成人愛着インタビュー (AAI) で測定することである。

第二の目的は、子ども、ケアワーカーそれぞれの愛着タイプ及びその愛着タイプの組み合わせによって、遊びにおける行動や相互作用の質に違いがあるのかを検討することである。

第三の目的は、子どもの愛着タイプと日常生活における行動、特に、問題行動に関連があるかを調査すること。また、ケアワーカーの愛着タイプは対人援助におけるバーンアウトなどと関連があるのかを調査することである。

3. 研究の方法

(1) 対象者：2地域 (X府とY県) の3箇所の児童養護施設が研究に協力してくれた。対象となった入所児童数は合計29名 (男児=12名、女児=17名) で、ケアワーカーは6名 (X府4名=全員女性；Y県2名=女性1名、男性1名) であった。入所児の年齢は4歳~10歳、平均年齢は6.4歳 (SD=1.70) であった。ケアワーカーの平均年齢は23.5歳 (SD=2.35) で、年齢幅は21~28歳であった。

(2) 指標

① 入所児の愛着：George & Solomon (1990, 1996, 2000) が作成したドールプレイを用いて測定した。このドールプレイは、子どもに「これからお家ごっこをします」と言い、キッチン、居間、寝室から成るドールハウスと家族を構成する人形を使い、実験者が物語の最初の部分を提示し、その後を子どもに作らせ、その物語の内容やドールプレイをしている行動から愛着を評定するものである。物語は「膝の怪我」「寝室のお化け」「分離と再会」の3つから成る。個人の最終的な愛着タイプは最後の「分離と再会」での評定となる。

ドールプレイの評定は、George & Solomonの主催するトレーニングワークショップで訓練を受け、その後、評定に関して認定を受けた研究代表者が行なった。評定の信頼性を確認するため、29ケース中10ケースを同様にドールプレイの評価認定を受けた他の研究者に依頼した。その結果80%の一致率であった。

② ケアワーカーの愛着：Adult Attachment Interview (AAI; George, Kaplan, & Main, 1984, 1985, 1996) によって評定された。AAIは半構造化面接法であり、面接において被験者はなるべく小さい頃を思い出し、その頃の愛着対象者 (主に母親と父親) との関係について尋ねられる。そして、語られた内容と語り方から愛着タイプを評定するものである。愛着タイプを決定する過程において、幼少期の愛着対象者との経験についての5項目と愛着対象者に対する現在の心理的状況の11項目を9段階で評定することになっている。そのため、愛着タイプだけでなく、被験者の被養育経験 (母親・父親の愛情、拒絶、ネグレクトなど) も得点化される。

インタビューはAAIの認定コーダーから訓練を受けた研究分担者が行なった。

AAIの評定は、AAIのトレーニングワークショップに参加し、コーディング認定を受けた研究協力者が行なった。評定の信頼性のため、6ケース全てを同様にコーディング認定を受けた別の研究者に依頼した。その結果、一致率は80%であった。

③ 入所児とケアワーカーの遊び場面における行動と相互作用の評定：子どもとケアワーカーは1対1で、施設内の一室で黒ひげとカブラを使って一緒に遊んだ。時間は約20分であった。二人が一緒に遊んでいる様子は無線式ビデオカメラを使い録画され、後の行動評定に使われた。

NICHD (National Institute of Child Health and Human Development) の研究 (2005) における母親と子どものインターアクションの評定項目を参考に、以下のような評定項目を設定した。子供の行動評定項目は、「楽

しさ」「活動の持続性」「攻撃性」「命令的」「従順さ」の5項目、ケアワーカーの行動評定は「楽しさ」「攻撃性」「支持的」「応答性」「自主性の尊重」の5項目であった。更に、子どもとケアワーカーの「相互作用」という項目も含めた。子どもとケアワーカーの行動評定は5段階で、相互作用は3段階で評定した。

それぞれの項目の定義と具体的な行動の点数を示したコーディングガイドラインを作成し、それに基づいて研究代表者、研究分担者の計3名が別々に評定を行なった。最終的な一致率の平均は、子どもの行動評定では80%、ケアワーカーの行動評定では82%、相互作用は89%であった。

④ 子どもの問題行動：子どもの行動チェックリスト学齢児版 (Child Behavior Checklist;以下 CBCL と称す) を使用した。CBCLは約100項目から成り、各項目に3件法で回答する方式になっている。それぞれの子どもに一番身近な生活担当のケアワーカーに回答を依頼した。

CBCLは、ひきこもり、身体的訴え、不安・抑うつ、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、非行的行動、攻撃的行動の8つの下位尺度からなり、ひきこもり、身体的訴え、不安・抑うつ、は内向尺度、非行的行動、攻撃的行動は外向尺度という上位尺度にまとめられている。得点が高いほど、問題があることを示している。

⑤ ケアワーカーのバーンアウト：「援助者のための共感満足／共感疲労の自己テスト」(藤岡, 2006; 2007) を使用した。この尺度は対人援助職に就いている者のバーンアウト、共感満足度や共感疲労度を測定するものである。

「バーンアウト」は17項目から構成されており、「情緒的消耗」、「個人的達成感の低下」、「脱人格化」の3因子から成る。「共感満足」は26項目から構成されており、「仕事仲間との関係における満足」、「利用者との関係の中での満足」、「援助者の資質としての満足」、「人生における満足感」の4因子から成る。「共感疲労」は23項目から成り、「代理性トラウマとして蓄積される共感疲労」、「否認感情」、「PTSD様の共感疲労」、「援助者自身のトラウマ体験」の4因子構造である。各項目について、「まったくない(0点)」から「かなり頻繁にある(5点)」の6件法で回答を求めた。本研究では、因子別得点の分析は行わなかった。

(3) 手続き

2010年8月から2011年1月の間に入所児童29名のドールプレイを実施した。その後、2011年3月に入所児とケアワーカーの遊びの

場面を録画した。同じ時期に、ケアワーカーのAAIのインタビューとバーンアウトに関する質問紙を実施した。

4. 研究成果

(1) 愛着タイプの組み合わせについて

① 愛着タイプの分布：ドールプレイによる子どもの愛着タイプとAAIによるケアワーカーの愛着タイプの分布を表1に示した。

表1
入所児とケアワーカーの愛着タイプ分布

	子ども	ケアワーカー
安定型/自律型	4 (14%)	4 (67%)
回避型/愛着軽視型	12 (41%)	1 (17%)
抵抗型/とらわれ型	7 (24%)	1 (17%)
混乱型/未解決型	6 (21%)	0

表1に示されたように、児童養護施設入所児の愛着タイプは安定型14%、不安定型86%と、安定型が圧倒的に少ないという先行研究(Katsurada, 2007)と同様の結果が得られた。本研究では、不安定型の中でも回避型が最も多いと言う結果であったが、この点では、先行研究と一致していない。

② 愛着タイプの組み合わせと遊び場面での子ども・ケアワーカーの行動、相互作用：
3分類の組み合わせ：愛着タイプを安定型、不安定型(回避型/愛着軽視型と抵抗型/とらわれ型)、混乱型・未解決型に分け、その組み合わせで分析を行なった(以後、愛着の組み合わせは子ども+ケアワーカー(CW)の順で示す)。本研究において7種類の組み合わせが見られたが、「安定型+愛着軽視型」、「混乱型+愛着軽視型」はそれぞれ1組しかいなかったため、その組み合わせは除き、5種類の組み合わせを要因とし、遊び場面での子どもとケアワーカーの行動評定、両者の相互作用において一元配置分散分析を行なった。その結果、ケアワーカーの攻撃性においてのみ有意差がみられた($F(4, 22)=3.11, p<.05$)。Duncanのその後の検定によると、「安定型+自律型」と「不安定型+愛着軽視型」は「不安定型+とらわれ型」よりも得点が低かった。各愛着組み合わせの攻撃性得点の平均値と偏差値を表2に示した。

表2 3分類による愛着組み合わせごとのケアワーカー(CW)の攻撃性得点

子ども+CW	n	平均値 (SD)
安定型+自律型	3	1.50 (.00)
不安定型+自律型	13	2.92 (1.32)
不安定型+愛着軽視型	3	1.33 (.29)
不安定型+とらわれ型	3	4.17 (.29)
混乱型+自律型	5	2.90 (1.52)

「不安定型+自律型」と「不安定型+とらわれ型」に有意な差がなかったことから「安定型+自律型」と「不安定型+とらわれ型」の差は子どもの愛着貢献度によるものと思われる。故に、ここで見られた結果は、愛着軽視型のケアワーカーととらわれ型のケアワーカーの違いと言うことになる。実際、ケアワーカーの愛着タイプごとの遊び場面におけるケアワーカーの行動評定を分析したと、攻撃性においてのみ有意差が示され ($F(2, 26)=4.78, p<.05$)、とらわれ型が愛着軽視型よりも有意に高い得点であった。しかし、本研究では、とらわれ型、愛着軽視型のケアワーカーは一人ずつであったため、この攻撃性の差は愛着タイプの差というよりも個人差である可能性もある。この点に関しては、より多くのサンプルでの追試が必要である。

2 分類の組み合わせ：愛着タイプを安定型と不安定型に分け、組み合わせた。4 種類の組み合わせが見られたが、「安定型+不安定型」の組み合わせは1組であったため除き、3種類の組み合わせを要因として、上記と同様の分析を行った。その結果、子どもの従順さ得点と子どもとケアワーカーの相互作用得点に有意傾向が示された（それぞれ、 $F(2, 25)=2.98, p<.10$; $F(2, 25)=2.71, p<.10$ ）。Duncan のその後の検定によると、子どもの従順さは、「安定型+安定型」の組み合わせが「不安定型+安定型」の組み合わせよりも有意に高かった。子どもとケアワーカーの相互作用においても同様の結果であった。愛着タイプの組み合わせによるそれぞれの得点の平均値と偏差値を表3に示した。

表3 愛着の組み合わせによる平均値 (SD)

子ども+CW	従順さ	相互作用
安定+安定	4.33(1.16)	3.00(.00)
不安定+安定	2.97(.99)	2.19(.65)
不安定+不安定	3.57(.84)	2.50(.50)

「安定型+安定型」と「不安定型+安定型」に有意な差がみられたことは、遊び場面の従順さや相互作用においては、ケアワーカーというよりも子どもの愛着の貢献度が大きいと言える。

(2) 子どもについて

① 子どもの愛着タイプと問題行動：子どもの愛着タイプにより CBCL の総得点、2つの上位尺度、8つの下位尺度に違いがあるのかを見るために、愛着タイプ (4 分類) を要因として一元配置分散分析を行った。その結果、総得点 ($F(3, 25)=5.52, p<.01$)、上位尺度の外向尺度 ($F(3, 25)=5.05, p<.01$)、下位尺度では、社会性の問題 ($F(3, 25)=2.95, p<.10$)、思考の問題 ($F(3, 25)=7.95, p<.01$)、

注意の問題 ($F(3, 25)=3.88, p<.01$)、非行行動 ($F(3, 25)=4.98, p<.01$)、攻撃行動 ($F(3, 25)=3.47, p<.05$)において有意な差が見られた。Turkey の多重比較によると、総得点、思考の問題で、混乱型が他のタイプよりも得点が高く、外向尺度、攻撃的行動では、混乱型が抵抗型よりも高く、注意の問題では混乱型が回避型や安定型よりも高く、非行的行動では混乱型が回避型や抵抗型よりも高かった。いずれにおいても、混乱型が一番問題行動が多いという結果であった。この結果は、不安定型である回避型や抵抗型はそれほど問題ではなく、社会的に問題があるのは混乱型であるとする近年の研究結果と一致するものである。

尚、性別や地域別による差はなかった。愛着タイプ別の有意差が出た問題行動の平均値と偏差値を表4に示した。

表4 愛着タイプ別問題行動の平均値 (偏差値)

	安定型	回避型	抵抗型	混乱型
総得点	21.25 (20.52)	22.08 (13.77)	18.14 (15.16)	55.00 (27.58)
外向尺度	7.25 (1.50)	8.67 (5.73)	3.71 (3.86)	17.83 (11.48)
社会性の問題	2.25 (2.06)	2.75 (2.26)	2.57 (2.51)	6.00 (3.16)
思考の問題	0.75 (1.50)	0.92 (0.79)	0.29 (0.49)	4.17 (3.06)
注意の問題	2.25 (3.30)	3.08 (2.81)	3.57 (4.08)	8.50 (4.23)
非行的行動	2.25 (2.22)	2.00 (1.91)	0.71 (1.11)	5.67 (4.03)
攻撃的行動	5.00 (2.94)	6.25 (5.22)	2.71 (3.25)	12.17 (8.21)

② 子どもの問題行動と遊び場面における子ども・ケアワーカーの行動評定との関連：相関分析の結果、子どもの非行的問題得点が高いと遊びにおける子どもの従順さが低い ($r=-.42, p<.05$) ことが示された。また、子どもの外向尺度得点、身体的訴え、非行的行動、攻撃的行動が高いとケアワーカーの遊びでの楽しさ得点が低いという結果であった。それぞれの相関係数と有意水準は順に、 $r=-.52, p<.01$ 、 $r=-.40, p<.05$ 、 $r=-.52, p<.01$ 、 $r=-.42, p<.05$ であった。

外向的問題行動が頻繁に見られる子どもとの遊びにおいてケアワーカーはあまり楽しそうではないという結果は興味深い。楽しくないとケアワーカーも自発的にそのような子どもと一対一で遊ぶことは少なくなると考えられるため、一層愛着の再構築は難しくなる。特に、外向的問題行動を抱える子どもとは、意識的に一対一で遊ぶ機会を多くもつことが必要であると言える。

(3) ケアワーカーについて

① ケアワーカーの愛着・被養育経験とバーンアウトの関連：本研究で使用した「援助者のための共感満足／共感疲労の自己テスト」は、「バーンアウト」の他に「共感満足」、「共感疲労」も測定している。そこで、それぞれの得点と愛着との関連を見た。愛着軽視型ととらわれ型のケアワーカーはそれぞれ一人ずつであったため、3分類による分析はできなかった。そこで、安定型と不安定型に分けた2分類でそれぞれの得点に差があるのかを見るためにt検定を行なったが有意な差はみられなかった。しかし、AAIで測定される被養育経験の各得点との関連が見られた。相関分析によると、母親の拒否得点が高ければバーンアウト得点が高く ($r=.89, p<.05$)、母親のネグレクト得点が高いと共感疲労得点が高い ($r=.73, p<.10$) という結果であった。また、父親のネグレクト得点が高いとバーンアウト得点が高い ($r=-.82, p<.10$) という関連も見られた。このことから、対人援助におけるバーンアウトなどは、母親のネガティブな養育行動から受ける影響が強いと言える。

② ケアワーカーの愛着・被養育経験と遊び場面での行動の関連：相関分析の結果、母親の拒否得点が高いと遊び場面における子どもへの支持が悪く ($r=-.93, p<.05$)、応答性も悪い ($r=-.82, p<.10$) ことが示された。また、母親からのプレッシャーが強いと遊び場面での子どもの自主性尊重が高く ($r=.80, p<.10$)、母親のネグレクト得点が高いほど遊び場面での楽しさが低い ($r=-.73, p<.10$) という結果であった。このことから、ケアワーカーの被養育経験が実際に子どもとの遊びにおける行動に反映されることがわかる。ケアワーカーの被養育経験は変えることが出来ないが、望ましくない被養育経験を受けている場合は、子どもとの関わりにおいて支持的なかかわり、より良い応答性ができるような特別な訓練が必要であると思われる。

一方、父親からの被養育経験に関しては、父親の拒否得点が高いと遊び場面において子どもの自主性尊重得点が高い ($r=.92, p<.10$) や、父親の愛情得点が高いほど遊び場面での楽しさが低い ($r=-.80, p<.10$) という矛盾した結果も示された。

③ ケアワーカーのバーンアウトと遊び場面における行動の関連：相関分析の結果、ケアワーカーのバーンアウト得点が高いと、子どもとの遊びにおける攻撃性が高く ($r=.73, p<.10$)、応答性が低かった ($r=-.82, p<.05$)。子どもの安定した愛着の形成には養育者の応答性が重要であることが言われているので、バーンアウトの程度が高いケアワーカー

は入所児童の愛着の再構築にネガティブな影響を与える可能性があると言える。ケアワーカーのバーンアウトへの対処も必要不可欠である。

5. 主な発表論文

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 谷向みつえ・赤澤淳子・桂田恵美子、ドールプレイから見た児童養護施設入所児童の特徴—Dタイプの子どもの反応事例から—、関西福祉科学大学心理・教育相談センター紀要、11、2013年(掲載決定)、査読無

[学会発表] (計3件)

- ① 荒井彩也香・赤澤淳子・桂田恵美子、児童養護の心理職員による個別対応が入所児の愛着と問題行動に与える影響、2012年11月25日、日本教育心理学会第54回総会、琉球大学
- ② Emiko Katsurada, Changes and stabilities of attachment types among institutionalized children in Japan, International Society for the Study of Behavioural Development 2012 Biennial Meeting, July 9, 2012, Edmonton, Canada
- ③ 佐藤沙菜子・赤澤淳子、児童養護施設入所児童の愛着形成について— Attachment Doll Playによる—、2011年3月25日、日本発達心理学会第22回大会、東京学芸大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桂田 恵美子 (KATSURADA EMIKO)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：90291989

(2) 研究分担者

赤澤 淳子 (AKAZAWA JUNKO)
仁愛大学・人間学部・教授
研究者番号：90291880
谷向 みつえ (TANIMUKAI MITSUE)
関西福祉科学大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：20352982

(3) 連携研究者

松見 淳子 (MATSUMI JUNKO)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：10340895